

# カフカの『判決』( 2 )

—二つの自己の闘い—

佐々木 博康

Kafkas *Das Urteil* (2)

—Der Kampf zwischen den zwei Ichs—

SASAKI, Hiroyasu

大分大学教育学部研究紀要 第41巻第2号

2020年3月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 41, No. 2, March 2020

OITA, JAPAN

## カフカの『判決』(2)

—二つの自己の闘い—

佐々木 博 康\*

【要 旨】 『判決』におけるゲオルクと父親の闘いは、カフカ内部の二つの自己の葛藤を表している。第一の自己は、商売における成功や結婚による安定をめざす、社会的存在としての自己である。第二の自己は、世間から距離を置き、孤独の中で自身の関心に従って生きることを望む、作家的存在としての自己である。この二つの自己はカフカの内部で併存していたが、カフカがフェリーツェ・バウアーに初めての手紙を書き、彼女との結婚を思い描くことで、両者のバランスはくずれる。結婚すれば社会的存在としての側面が前面に出てきて、作家的存在としての部分は追いやられることになる。カフカの二つの自己の葛藤が先鋭化し、自分はどのように生きるべきなのか、という問いがカフカを圧迫する。この問いがこの物語を生み出す動因となっている。カフカは『判決』を書くことで、自分の葛藤に答えを出そうとしている。では物語を書くことによってどのような結論が出たのか。主人公ゲオルクの死がそれを示している。この物語のメッセージは、作家的自己は絶対に切り捨てることはできないということである。『判決』はいわばカフカの作家宣言なのである。

【キーワード】 葛藤 フェリーツェ 結婚 作家宣言

### 3. 父親からの非難

#### (3) ゲオルクの反応

『判決』はゲオルクの二つの自己の闘いを描いており、ゲオルクの第二の自己は父親の姿で、社会的存在としてのゲオルクを攻撃してくる。攻撃されるゲオルクはどのような反応を示しているだろうか。それを次に見ていく。

父親から延々と罵られるにもかかわらず、ゲオルクはほとんど反論らしい反論をしない。父親の非難に対して、口を差し挟むのはわずか三回である。その三回も直接の反論ではなく、皮肉や揚げ足取りのような取るに足りないものにすぎない。私たちが悪夢を見るとき、夢の中の自分が呪縛されたようになって何もできないことがあるが、それに似ている。後半の第二部をもう一度最初から見てみよう。

---

令和元年 10 月 30 日受理

\* ささき・ひろやす 大分大学教育学部言語教育講座 (ドイツ文学)

ゲオルクは、ベッドに立ち上がった父親から「おまえはあの男（ロシアの友人——引用者注）を何年にもわたってだまし続けてきたんだ」（56）といきなり咎められる。しかし、ゲオルクは父の言葉を否定しない。ゲオルクがするのは「破滅していく友人の姿」を思い浮かべることだけである。

父が突然よく知っていると言い始めたペテルブルクの友人が、これまでなかったほど強く彼の心を捉えた。遠いロシアで破滅していく友人の姿が見えた。略奪され尽くし、空っぽになった店の戸口にいる彼の姿が見えた。瓦礫となった棚、粉々になった商品、はずれかかったガス灯のアーム、それらの間で彼はなおも立っていた。どうして彼はそんなに遠くに行ってしまうなければならなかったのだろう！（56）

なぜゲオルクはこのようなことを想像しているのだろうか。幻想の中のゲオルクは現実のゲオルクがしないことをしている。ここでのゲオルクは想像力によって友人を理解しようとしている。友人の姿をまざまざと思い浮かべること、その心情に近づこうとしている。前半のゲオルクの「明らかに道はずれてしまった男で、気の毒に思うことはできるが助けることはできない」という理性による冷静な判断とは異なった理解の仕方が行われている。

父親がゲオルクの口真似をして、「だってスカートを持ち上げたんだもの」と挑発したときは、ゲオルクは次のように反応している。

ゲオルクはできるだけ父から離れて片隅に立っていた。ずっと以前、彼は堅く決心したことがあった。後ろからとか、上からとかのように、思いがけない方向から驚かされることのないよう、すべてを完全に正確に観察しようと思ったのだ。今とつくに忘れていた決心を再び思い出したが、短い糸を針の穴から引き抜くようにまた忘れた。（57）

父のすさまじい侮辱に対してゲオルクは何も言っていない。ここで述べられているのは、ゲオルクがかつて社会的存在として生きていくために「すべてを完全に正確に観察しよう」と「決心」したことがあったということである。競争を勝ち抜いて社会的ヒエラルヒーの上昇を果たすために、自分の感情を押し殺して仮面をかぶって生きようと決めたことである。ゲオルクはその決心を「とつくに忘れて」いた。忘れていたのは、覚えておく必要がないほどそのような生き方が身についてしまっていたからである。「また忘れた」のは、そのような決心そのものが今どうでもよいものになりつつあることを示している。ゲオルクは父の攻撃を受けて、そのような決心をする以前へと退行しつつある。ゲオルクがかぶってきた対社会的ペルソナが壊れつつある。

ゲオルクが初めて言葉を発するのは、父が勝ち誇ったように、「わしはこの地における彼の代理人だったのだ」と叫んだときのことである。

「喜劇役者だ！」とゲオルクは思わず叫び、すぐにそれが父に与えた傷（Schaden）に気づいて舌をかんだ。が、遅すぎた。両目が凝固し、あまりの痛さに思わず体を折り曲げた。（58）

「喜劇役者だ」は真っ向からの反論ではなく、父の発言に対する単なる皮肉にすぎない。しかし、ゲオルクはその言葉を口にすることをすぐに後悔し、「両目が凝固し、あまりの痛さに思わず体を折り曲げ」るほど強く舌をかむ。「父に与えた傷に気づいて」とあるように、ゲオルクがかぶっている孝行息子の仮面がまだ貼り付いているのである。

しかし、父親からさらに、「わが息子殿は小躍りしながら浮かれ歩き、わしが道をつけてやった仕事の契約をまとめ、満足しきってとんぼ返しをしてござる」(58)と、商売の手柄まで横取りされたときには、ゲオルクは次のように思う。

「すぐ前に傾くぞ」とゲオルクは思った。「倒れて粉々になればいい！」この言葉が彼の脳裏をさっと通りすぎた。(58)

一瞬ではあるが、父に殺意のようなものを感じている。ゲオルクの内面の激しい怒りの感情が噴出ししかかっている。ここにはもはや孝行息子の面影はない。

父は追い打ちをかけるように、「おまえの顧客リスト (Kundschaft) はこのポケットの中だ」(59)と言う。そのときゲオルクは次のように考える。

「寝間着にまでポケットをつけている！」とゲオルクは思った。このことを言いふらすだけで、父を世間の笑いものにすることができると思った。彼がそう思ったのは一瞬の間だけだった。というのも、彼はすべてを忘れ続けていたからだ。(59)

ここには社会的存在としてのゲオルクの考え方が露骨に表れている。有利な材料を得て、競争相手を追い落とし、優位に立とうと考えるのである。孝行息子の仮面の背後にある、父親の権力を篡奪して商売の実権を握ることへの強い欲求が露呈している。ただ、ゲオルクがそう思うのは「一瞬の間だけ」である。ここでもゲオルクは「すべてを忘れ続けて」いる。ゲオルクは、社会的存在として厳しい競争の中を生き抜いていくために不可欠な方法を獲得する以前へと戻りつつある。

父はさらに、「婚約者の腕にぶら下がって、向かってこい」(59)とゲオルクに言い放つ。

ゲオルクはとても信じられないというふうに顔をしかめてみせた。父は自分が言ったことが真実だと主張するように、ゲオルクのいる片隅に向かってうなずきただけだった。(59)

ゲオルクがするのは、「顔をしかめてみせ」ることだけである。そしてゲオルクのしかめっ面は、父親からは完全に無視される。

父親が、ロシアの友人に自分から手紙で知らせてやったので、彼は「何もかも千倍もよく知ってるんだ」(59)と言ったとき、ゲオルクはようやく二言目を発する。

「一万倍もでしょう！」とゲオルクは言った。父をあざ笑おうとしたのだが、その言葉は口の中にあるうちにもう、ぞっとするほど真剣な調子で響いた。(59)

ゲオルクが言う「一万倍もでしょう」もまた真っ向からの反論ではない。父親の単なる揚げ

足取りにすぎない。何の効果もないどころか、自分が口にした言葉が自分に跳ね返ってくる。「ぞっとするほど真剣な調子で響いた」とあるように、ロシアの友人との間で手紙のやり取りをしているという父の主張を、ゲオルクはすでに信じかけている。

父親は最後に、「何年も前からおまえがこのこと（ロシアの友人とのこと——引用者注）を聞きにくるのをずっと待っていたんだ」（59f.）と明かす。ゲオルクの反応は次のようなものである。

「つまり僕を待ち伏せしていたんですね」とゲオルクは叫んだ。（60）

これが後半第二部におけるゲオルクの三言目である。ゲオルクは、父親が実際にロシアの友人と手紙のやりとりをしており、そのことをゲオルクに暴露して打撃を与えようと手ぐすね引いて待っていたのだと認めたのである。「僕を待ち伏せしていたんですね」は、ゲオルクにとってはいわば敗北宣言である。

#### （4）父の死刑宣告

父親の「暗い」部屋は無意識の世界である。そこでゲオルクのもう一つの人格が父親の姿をとって社会的存在としてのゲオルクを攻撃する。ゲオルクはいろいろなことを思い出しては忘れる。日常的意識が遠ざけていることをフラッシュバックのように思い出し、また忘れていく。意識が押さえつけている激しい感情が社会性の覆いなしに露骨に現れる。無意識の側からのむき出しの攻撃によって、ゲオルクの対社会的ペルソナが徐々に壊されていく。そして父の最終的な判決が下る。

「これでおまえは自分以外にどんなものがあるかがわかっただろう。これまでおまえは自分のことしか知らなかったのだ！ 無邪気な子供だったわけだが、本当は悪魔のような人間だったのだ！ ——それゆえ、聞くがいい。今わしはおまえに溺死刑を宣告する！」（60）

父親はゲオルクの罪を自己中心性として総括し、それに対する罰として「溺死刑」を宣告している。もちろん罪に対する罰としては釣り合っていない。しかし、これはゲオルクの白昼夢なのであって、死刑判決が意味しているのは社会的存在として生きるゲオルクの全面的な否定である。ゲオルクのもう一つの自己がゲオルクの現在の生き方に死刑判決を下している。ゲオルクのペルソナを粉々にする最後の一撃である。

父親の判決は、前半でゲオルクが友人に下した「判決」と対をなしている。ゲオルクが友人を見限ったように、ゲオルクはもう一つの自己によって見限られる。後半の父親とゲオルクの関係は、前半のゲオルクと友人の関係の陰画となっている。後半の幻想世界は日常的現実をひっくり返した世界なのである。

## 4. ゲオルクの死

父親による死刑宣告でゲオルクの幻想は終わらない。ゲオルクはさらに、その死刑判決に従って自分が死んでしまうところまで空想している。これが後半の第三部である。

ゲオルクは「追い立てられるように」(60) 父の部屋を飛び出し、家の外に走り出て川に向かう。橋の手すりを「すばらしい体操選手のようにひらりと」(61) 飛び越える。

子供のときには体操が得意で、それが両親の誇りだった。(61)

ゲオルクは子供のときの自分を思い出している。ここで明らかになっているのは、社会的上昇をめざす生き方をするゲオルクの原点である。もともとはゲオルクも両親の期待に応えようとする素直な子供だったのである。そしてその後もおそらく両親の期待に沿うようにと頑張ってきただろう。そのような生き方の延長線上に現在のゲオルクがいる。競争社会で勝ち抜くためにペルソナを被ったのである。自分の素直な感情を押し殺して、「すべてを完全に正確に観察しよう」とする態度を身につけ、あらゆることを自分にとって有利になるか、不利になるかという観点からしか見ないような人間になっていったのである。ただ、子供のときのことを思い出している現在のゲオルクは、もはやペルソナを被っていない。

力の失せていく両手でまだしっかりと手すりを握り、鉄柵の向こうにバスがやってくるのをうかがっていた。バスは彼の落下の音を容易にかき消してくれるだろう。(61)

ここでのゲオルクは、父の判決にあった「自分のことしか知らな」い人間ではもはやない。自分の自殺がこの世界に何の影響も与えないようにと配慮している。ここには他者への深い配慮が見られる。

ゲオルクの最後の言葉は次のようなものである。

「お父さん、お母さん、僕はずっとあなたがたを愛していました。」(61)

父親はゲオルクを罵倒する中で、「わしがおまえを愛してこなかったとでも言うのか？ 血を分けた親であるこのわしが」と言っていた。唐突に思われるゲオルクのここでの呼びかけは父のこの発言に応えるものである。父の言葉は怒りから発せられているが、息子へのこれまでの愛を伝えるものである。父親が自分の感情を露わにするのとは対照的に、ゲオルクはこれまで、父が「よそよそしい紳士づら」と批判したように感情を押し殺して生きてきた。ペルソナが壊れた今、ゲオルクは子供に返って、心の奥に押し込められていた感情を表に出している。ここには素直なゲオルクがいる。

物語の最後は次のような一文で終わっている。

その瞬間、橋の上をまさに無限の雑踏 (ein geradezu unendlicher Verkehr) が動いていた。(61)

「その瞬間」というのはゲオルクが手を放した瞬間のことである。ゲオルクが意図したように、「落下の音」はかき消される。「雑踏」と訳した部分は原語では「Verkehr (交通)」であり、具体的にはバスや車や人などの往来を指している。「Verkehr (交通)」だけなら普通の表現である。しかし、「Verkehr (交通)」という言葉に「unendlich (無限の)」という形容詞がついてい

るのは普通ではない。明らかに異化表現である。「無限の雑踏」は「生」の大河を意味しているだろう。ヒエラルヒーの上昇をめざして人々が互いに競い合う世界である。ゲオルクは今その世界から離脱するが、その世界はゲオルクが死んでも、その死とは関わりなく「無限」に続いていくのである。

## 5. 全体のまとめと補足

以上、『判決』を解釈してきた。まとめてみよう。

競争社会で他者を打ち負かし社会的上昇を果たす、それがゲオルクの人生の目標である。ゲオルクはこれまでその目標をめざして生きてきた。しかし、心の奥底ではこのような自分の生き方に疑念も感じている。それが後半の幻想を生じさせている。後半の幻想とは、ゲオルクが意識から排除し、無意識に押し込めてきたものが悪夢として出現し、自己主張を始めたものである。父親はゲオルクの無意識の人格化であり、ゲオルクのもう一つの自己を表している。ゲオルクのもう一つの自己が、社会的存在として生きる現在の自己を攻撃し、徹底的に否定するのである。『判決』はゲオルクの二つの自己の闘いを描いている。

ではなぜ二つの自己の闘いが生じたのだろうか。それはゲオルクが婚約したことと関係しているだろう。自分の生き方は本当にこれでいいのかという葛藤は、いつもゲオルクの内部にあったはずである。ただ、これまでは意識が疑念を押さえつけていた。疑念を無意識の領域に追い払っていた。しかし、婚約が決まり、どのような方向で生きていくかがはっきり決まる状況になってきた。結婚すればもう後戻りできない。ゲオルクの内部の葛藤が激しくなったのはそのためである。本当にこのままでいいのかという不安が強まり、白昼夢を見たのである。

さて、物語はゲオルクの葛藤に結論を出していない。ゲオルクの生き方が後半で否定されると言っても、それはあくまで幻想の中でのことである。ただ、読者は、幻想から覚めた机の前のゲオルクはどうするだろうかと考えてみるができる。幻想を振り払い、何事もなかったように手紙を出すだろうか。それとも、手元にある手紙を破り捨て、新たな手紙、より友人らしい手紙を書くだろうか。ゲオルクはどのような生き方をすべきなのか、この物語はこのような問いを読者に投げかけてくる。

## 6. 作者との関連

以上見てきたように、『判決』は主人公の二つの自己の葛藤を描いている。そしてこの葛藤は作者カフカの葛藤でもある。最後に、この物語と作者の関係を簡単に見ておこう。

### (1) 『判決』執筆の二つの動因

まず、『判決』誕生の背景にあるカフカの状況を見ていく。

『判決』執筆の直接的な動因となっているものとして、二つの事柄が考えられる。一つはカフカがフェリーツェに手紙を書いたことである。『判決』執筆の一ヶ月以上前の1912年8月13日、カフカは友人のマックス・ブロート宅でベルリンのキャリア・ウーマン、フェリーツェ・パウアーと知り合った。5週間にわたる長い逡巡の末、9月20日になってカフカは彼女に最初の手紙を出した。ブロート宅で話題になったパレスチナ旅行のことを引き合いに出して、彼



女に文通を求めたものである。当時、カフカの周囲では結婚や婚約が相次いでいた。1910年の11月末、カフカの一番上の妹エリが結婚した。1912年9月15日には二番目の妹ヴァリの婚約が成立する。一番の友人ブローツの婚約がまとまりそうになってきたのもこの頃のことである<sup>2)</sup>。29歳のカフカが自分の結婚を意識するようになっていたとしても当然のことである。手紙を出したことによる興奮が、主人公の婚約を描いた『判決』執筆と関連しているだろう。

もう一つの動因は、『判決』が書かれることになる9月22日の日曜日の昼に、ヴァリの婚約者、ヨーゼフ・ボラックの親族がカフカ家を訪問したことである。カフカは後にこの日のことをふり返って、フェリーツェに宛てて、「叫びたいほど不幸な日曜日だった」、「僕は午後中ずっと、そのとき初めて家に来た僕の義弟の親族たちの周りを黙ってぐるぐる回っていた」<sup>3)</sup>と書いている。ヴァリの婚約者一家の来訪が、カフカに改めて、結婚にはそのような世間的な交際がつきものであることを思い知らせたのである。その夜、机に座ったカフカは「一つの戦争」<sup>4)</sup>を書こうと考える。カフカの内部に渦巻いていたのは不快感であつたに違いない。カフカによれば、「でもそれからすべてがすっかり変わって」<sup>5)</sup>、『判決』となる。

このように、カフカは一方ではフェリーツェに手紙を書くことで結婚に向けて大きな一歩を踏み出した。しかし他方ではカフカ自身の内部に潜んでいた、結婚によって世間的つき合いの中に取り込まれることへの嫌悪も噴出している。このような両極端の感情の振幅の狭間で『判決』は成立したのである。

## (2) 登場人物のモデル

次に、登場人物のモデルについて考えてみよう。

ゲオルク・ベンデマンのモデルが作者カフカであることは明らかである。カフカは日記やフェリーツェ宛の手紙で、主人公ゲオルク・ベンデマンの名前を分析している。Georg (ゲオルク) の文字数が自分のファーストネーム、Franz (フランツ) と同じであること、また Bendemann (ベンデマン) の Bende も Kafka (カフカ) と同じ文字数であり、Bende の母音 e の位置も Kafka の母音 a と同じ位置にあること、Mann (男) については、Bende に「たぶん同情心から、彼の闘いに備えて力を与えようとして」付加されたものだろうと述べている<sup>6)</sup>。若い商人ゲオルクは、社会的存在としてのカフカである。大学で博士号を取得し、労働者災害保険局に勤務してからもその能力を評価されている人物である。ブローツらブラハの教養人たちや社会的名士たちとも交流がある。一方、ロシアの友人もまたカフカの分身である。「書くこと」を自分の「唯一の仕事」<sup>7)</sup>とみなす作家的存在としてのカフカである。『判決』の中にロシアの友人と「書くこと」を直接結びつける表現はないが、カフカがブラハに息苦しさを覚え、生涯にわたってそこからの脱出を夢見ていたことや、日記において自由、孤独、非社交性、独身生活などを「書くこと」の側に位置づけていることから、ロシアの友人に作家的存在としてのカフカが投影されているのは明らかである。これはすでに研究の初期から指摘されてきたことである<sup>8)</sup>。

ロシアの友人にはまた、イディッシュ語劇団の俳優イツハク・レーヴィの生き方も反映されている。すでにブローツが、ロシアの友人にはレーヴィを思わせる場所が多々あると述べている<sup>9)</sup>。イディッシュ語劇団がブラハにやってきたのは、1911年の秋から翌年の初めにかけてで、『判決』成立の1年ほど前のことである。カフカはこの劇団をサポートし、上演の成功のために尽力した。劇団の主宰者レーヴィと親しくなり、家に呼んだりしている。レーヴィは当時のロシア領(現在はポーランド)出身である<sup>10)</sup>。厳格な父親と喧嘩別れし、劇団に加わりヨー



ロッパ各地を巡業して回っている。貧しいながらも芸術にすべてを献げて自由に生きている。カフカが、不満を抱きつつも生まれたプラハにとどまり、父親に反発しながらもその家で暮らし、「書くこと」に没頭したいと思いつつもきちんとした職につき、そつのない社会生活を送っているのとは正反対である。自分がしたいとは思っているができないでいる生き方を実践しているレーヴィに、カフカがもう一人の自分を見た可能性は高いだろう<sup>11)</sup>。

次に婚約者について見てみよう。これについてもカフカ自身による名前の分析がある。婚約者の名前 **Frieda Brandenfeld** (フリーダ・ブランデンフェルト) の頭文字が **Felice Bauer** (フェリーツェ・バウアー) と同じであること、**Brandenfeld** の **Feld** (畑) と **Bauer** (農民) が関連していること、ひょっとしたら **Branden** は **Mark Brandenburg** (ブランデンブルク辺境伯領)——フェリーツェの住むベルリンはかつてここに属していた——から来ているかもしれないことを、カフカはフェリーツェ宛の手紙や日記で指摘している<sup>12)</sup>。ただ、カフカのこのような分析は『判決』執筆後に行われたものである。つまりフェリーツェのことを想定して婚約者を造型したのではなく、書き終えた後で改めて見るとそのような一致が見られたのである。無意識のうちにフェリーツェが婚約者のモデルとなっていたということである。

ゲオルクの父親についてはどうだろうか。カフカの父親そのものだろうか。確かに巨躯であることで息子に圧迫感を与えるところ、啞然とするような罵倒の仕方、息子に商売の実権を奪われまいとするとところに見られる権力への執着心など、カフカの父親と共通する部分がある。しかし本質的なところでは大きく違っている。

ゲオルクの父親がカフカの父親なら、野心を持って商売の拡大をめざし、結婚さえも商売との関連で考えるゲオルクを頼もしく思うだろう。「裕福な家の娘」と結婚し、社会的・経済的上昇を果たすというのは、まさにカフカの父親がしたことだからである。父ヘルマンは裕福な醸造業者の娘である母ユーリエと結婚することで、夢であった自分の店を持つことができた。そしてそれを大きく成長させて、ついにはプラハの中心部に高級装飾品店を構えるに至ったのである<sup>13)</sup>。

また、カフカの父親なら、ロシアの友人を敗残者として切り捨てるゲオルクの態度も当然と考えただろう。『判決』にはロシアの友人がゲオルクの家を訪ねてきたときのことが語られている。ゲオルクの父親は最初こそロシアの友人に「あまり好意を持たなかった」(54) のであるが、その後「かなり打ちとけ」(54)、友人の話に「耳を傾け、うなずき、質問」(54) をしている。そして友人が語ったロシアの革命の話に感銘を受け、「あちこちで語」(54) る。ゲオルクの父親はロシアの友人に好意的である。この訪問の元となっているのは、俳優レーヴィのカフカ家訪問だと思われる。レーヴィがカフカ家に来たときのカフカの父親の反応は、物語の父親とはまったく逆である。『父への手紙』によれば、父親は「レーヴィのことをよく知りもしないのに(……)、とにかくすさまじい言い方で害虫に譬え、(……) 機械的に犬と蚤の諺を持ち出し」<sup>14)</sup> た。「犬と蚤の諺」とは、「犬と一緒に寝ると、蚤と一緒に起きることになる」というもので、あんなやつと付き合っているとおまえにも汚れがうつるぞという意味である。プラハで社会的上層を占めるに至った父親から見れば、イディッシュ語劇にうつつを抜かし、その日暮らしに近い生活を送っているレーヴィは浮浪者同然だったのである。

『判決』の父親は野心的なゲオルクの生き方を非難し、ロシアの友人の方を「わしの心にかなう息子」であると言う。カフカの実際の父親とは正反対の人物である<sup>15)</sup>。姿形や振る舞いは現実の父親をモデルにしているが、物語内の役割としてはゲオルクの第二の自己であるロシア

の友人の代弁者となっている。

### (3) カフカが描いているのは未来の自分

最後に、物語の状況設定と当時のカフカの生活状況がどのような関係にあるのかを見ていく。

『判決』の設定では、主人公ゲオルクは婚約している。父親は高齢のために仕事から遠ざかりつつある。母親はもうすでに亡くなっている。当時のカフカと両親の状況はどうだっただろうか。カフカはフェリーツェにやっとの思いで手紙を出したばかりである。カフカの父親は60歳になったばかりで、『判決』執筆後の10月にプラハ中心部の旧市街広場(Altstädter Ring)にある美しい建物キンスキー宮殿に店を移す。商売の絶頂期だった。母親は56歳である。夫を助けて装飾品店の仕事に没頭していた。

つまり、『判決』が描いているのはカフカの当時の生活状況ではない。カフカの未来の状況である。フェリーツェに手紙を出した時点で、カフカは自分の未来を想像したに違いない。フェリーツェから返事が来て文通が始まったらどうなるだろうかと考えたはずである。文通が順調な進展を見せれば婚約に至るだろう。そのときには母が亡くなっているかもしれないし、「心臓神経症(Herznerosität)」<sup>16)</sup>を抱えている父親は商売から遠ざかっているかもしれない。自分が一家を背負って生きていくことになる。結婚し一家の大黒柱として生きていくことは、責任を持って一人の社会人として生きていくことである。カフカがそのような未来を想像したとき、『判決』の社会的存在としてのゲオルクが生まれたのである。このような方向で生きていくことで本当にいいのか。それがカフカの問いである。この問いを持ってカフカは『判決』を書き始めた。『判決』はいわばカフカの生のシミュレーションである。未来の時点に自分を置いてみて、それで自分は満足できるだろうか、そのような生き方を貫いていけるだろうかと問うているのである。物語の前半で問いが設定され、後半はその問いに対する答えとなっている。物語を書くことによって、どのような結論が出るのかをカフカは確かめようとしている。

では、どのような結論が出たのだろうか。それはこれまで見てきたことから明らかなように、社会的存在として生きていくことは絶対にできないということである。「ちゃんとくるまれていますよ」というゲオルクの言葉に対する父親の断固たる否定、「そんなことはない(Nein)！」というのは、カフカの無意識の叫びである。「書くこと」を欲する自分を「くるみ込んで」生きていくようなことは断じてしたくないという心の奥底からの叫びである。ゲオルクの父親による死刑宣告は、カフカ本来の自己である作家的自己が、社会的存在としての自己に下す死刑宣告である。『判決』はカフカにとって、いわば作家宣言である。自分は「書くこと」によって生きるしかないという自己確認である。フェリーツェに手紙を出したことが、その反動として『判決』をもたらしたのである。

しかし、その後の現実にはカフカが『判決』で行った自己確認のままには進行しない。自分の生の方向性を確認したカフカは、一方ではすさまじい勢いで最初の長編『失踪者』を書き始めるが、他方ではフェリーツェとの関係も進展していく。しかし、結局両方ともうまくいかなかった。『失踪者』は行きづまり、やがて執筆が放棄される。フェリーツェとの関係も、5年間の紆余曲折の末に破綻に終わる。そしてこの間ずっと、カフカの二つの自己は闘い続けたのである<sup>17)</sup>。

## むすび

『判決』は一見すると、従来のリアリズムの物語とは大きな断絶がある物語に見える。しかし、描いているのは、やはり文学の根本的なテーマ、人間の生き方の問題である。

多くの文学作品はこれまで主人公の葛藤を描いてきた。複数の選択肢を前にして、どのような道を選べばいいのかに悩み、解決を求めて苦しむのが従来の物語の主人公だった。カフカの物語もまた主人公の葛藤を描いている。しかし、カフカの場合、葛藤は主人公の意識の中にあるのではない。それは意識と無意識の葛藤である。主人公は存在自体としては危機に瀕している。しかし、主人公は自身の問題性を本当には知らない。漠然と何か不安を感じているだけである。主人公はそれを押さえつけようとする。しかし、無意識に追いやられたもう一つの自己が主人公の生き方に異議を唱える。幻想という形で主人公の生き方に強い警告を発する。現在の自己と無意識に押し込められたもう一つの自己の葛藤、これがカフカの描く葛藤である。

精神的問題として見るならば、19世紀までの作家が描く主人公の意識的な葛藤よりも、葛藤が意識されないまま先鋭化し、あるとき人間存在自体を一気に崩壊させてしまうというカフカの描く葛藤の方がより危険であると言えるだろう。『判決』は——そしてこれに続く『変身』も——このような20世紀以降の人間存在の危機をリアルに描き出しているのである。

## 注

- 1) 1912年9月28付のフェリーツェへの二通目の手紙で、最初の手紙の文面をまとめるために「十夜にわたって」苦闘したと書いている。Kafka, Franz: *Briefe 1900-1912*. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch. Frankfurt a. M. 1999, S. 174f.
- 2) Binder, Hartmut: *Kafka Kommentar zu sämtlichen Erzählungen*, München: Winkler Verlag, 1977 [1975], S. 141f. プロートの婚約は1912年12月15日に成立。
- 3) 1913年6月3日付のフェリーツェ宛の手紙。Kafka, Franz: *Briefe 1913-1914*. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch. Frankfurt a. M. 1999, S. 201-2.
- 4) Ebd., S. 202.
- 5) Ebd.
- 6) 1913年2月11日の日記および同年6月3日付のフェリーツェへの手紙。Kafka, Franz: *Tagebücher*. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch, Michael Müller und Malcolm Pasley. Frankfurt a. M. 1990, S. 492. Kafka, *Briefe 1913-1914*, a. a. O., S. 201.
- 7) Kafka, *Tagebücher*, a. a. O., S. 579.
- 8) Flores, Kate: The Judgment. In: *Franz Kafka Today*, hrsg. v. A. Flores und H. Swander, New York: Gordian Press, 1977 [1958], S. 5-24.
- 9) Brod, Max: *Über Franz Kafka*. Frankfurt a. M.: Fischer 1980, S. 101.
- 10) フェリーツェ宛の手紙でカフカは、「彼(＝レーヴィ)はロシア人です」と述べている。Kafka, *Briefe 1900-1912*, a. a. O., S. 367.
- 11) 瓜生研二「動物変身譚の比較研究——カフカの『変身』と中島敦の「山月記」——」(東大比較文学会『比較文学研究』第45号, 1984, 63-89頁) 78頁。
- 12) Kafka, *Briefe 1900-1912*, a. a. O., S. 188. Kafka, *Tagebücher*, a. a. O., S. 492. Kafka, *Briefe 1913-1914*, a. a. O., S. 201.
- 13) Pawel, Ernst: *Das Leben Franz Kafkas. Eine Biographie*. Aus dem Amerikanischen von Michael Müller, Reinbek bei Hamburg 1990, S. 14ff.

- 14) Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Jost Schillemeit. Frankfurt a. M. 1992, S. 154.
- 15) この点で筆者はフローレスと同じ考えである。Flores, a. a. O., S. 22.
- 16) 『父への手紙』にある言葉。Kafka, NSF II, S. 158. 明星聖子『カフカらしくないカフカ』慶應義塾大学出版会, 2014, 84-86 頁も参照のこと。
- 17) カフカの二つの自己については, 1914 年 11 月 1 日と 2 日に書かれたと推定されるフェリーツェ宛の手紙を参照のこと。Kafka, *Briefe 1914-1917*, a. a. O., S. 107.

## Kafkas *Das Urteil* (2)

—Der Kampf zwischen den zwei Ichs—

SASAKI, Hiroyasu

### Abstract

Kafkas Persönlichkeit ist keine Instanz, in der gesellschaftliche Normen und eigene Überzeugungen harmonisch in Einklang stehen; Dissonanz und Widersprüchlichkeit sind vorherrschend.

Diese Problematik durchzieht auch seine Erzählung *Das Urteil*, in der die Hauptfigur Georg für den Verfasser steht. Georg fühlt sich bewusstseinsmäßig einem konventionell verstandenen Arbeits- und Gemeinschaftsethos verbunden; die Essentials: Erfolgsorientierung, Statusdenken, Ehestand. Aber unbewusst erfüllen ihn die damit einhergehende Weltzugewandtheit und andere soziale Implikationen mit Abscheu und Widerwillen; in dieser unbewussten Seite Ichs wurzelt der fester Glaube, sich von der Welt abwenden, auf soziale Distanz setzen und Einsamkeit pflegen zu müssen.

Letzteres gilt Kafka als eine *conditio sine qua non* der Existenz als Schriftsteller. Alles andere ist mit seinem Selbstverständnis unverträglich. Auch eine Ehe, die soziale Institution *par excellence*, kommt von daher nicht in Frage. Folgerichtig spitzt sich besagte Unvereinbarkeit mit Kafkas brieflichem Heiratsantrag an Felice Bauer zu; dass die Abfassung der Erzählung in eben diese Zeit fällt, ist mithin kein Zufall: Kafka beschaut sich und seine Lage in einem literarischen Spiegel.

In der Geschichte stirbt Georg, sodass die Botschaft ihres Autors eindeutig ist: Zweisamkeit und die daraus erwachsenden Tugenden, Erwartungen und Zwänge sind Gift für die schriftstellerische Existenz, schlimmstenfalls ihr Ende.

【Key words】      Konflikt, Felice, Heirat, Schriftsteller